

La Harmonio

N-ro 218

Tutlanda Organo de Rondo Harmonia
Eldonejo : Rondo Harmonia

<< 目次 >>

2009年RH組織委員選挙 立候補受付 2 ㊦

第95回日本エスパーント大会で「ミニ大学」を開催 3 ㊦

ミニ大学「中小企業白書」今泉久典さん(岩手) 4~5 ㊦

「国際言語年」記念シンポジウム 竹森浩俊さん(奈良) 6~11 ㊦

ねこの手エスパーント部発 山口百合子さん(横浜) 12~15 ㊦

日本エスパーント大会で エスパーント・ミニ大学を開催



和歌山市での日本大会でミニ大学を
開催し、3テーマを発表しました。
(3~5 ㊦を参照)

左上: 笹沼さん、右上: 今泉さん
左下: 森川さん

2009年 RH組織委員選挙 立候補の受付

2009年RH組織委員への立候補を下記のとおり受け付けています。
積極的な立候補をお待ちしています。

* 立候補受付締切

2009年1月17日(土)

* 立候補資格

2006~2008年の3年間に無断会費滞納がないこと。

その間に入会された会員の場合は、入会後の会費に滞納がないこと。

* 立候補申込方法

必ず文面にて(電子メールも可)選挙管理委員会まで届け出てください。

RH組織委員選挙管理委員会

〒427-0024 静岡県島田市横井 2丁目22-7 杉山茂喜気付

TEL 0547-35-4131 電子メール musxo2@yahoo.co.jp

また、2009年1月17日(土)までに選挙公報の原稿を本誌編集部(16
㊦参照)に送付してください。内容は下記のとおりです。(昨年と同じ)

1. 立候補者の自己紹介、経歴

氏名、年齢、性別、職業、住所、入会年、活動歴

2. 現在のRH活動およびエスパーント運動についての意見

3. 2009年度、どのような活動を目指すのか

2000字以内。顔写真をできるだけ付けてください。

選挙公報は本誌219号(2009年2月発行)に到着順で掲載します。

* 投票資格

2008年会費を納入済みの会員

* 投票及び開票

投票資格をお持ちの方に投票用紙を送ります。記入した投票用紙を返
信用封筒に入れ、選挙管理委員会まで返送してください。2009年3月
の全国協議会にて出席者立会いのもとに開票し、投票結果は本誌220
号(2009年5月発行)にて発表します。

<El la redaktoro>

Rondo Harmonia havas la Direktivan Komitaton kiel la gvidan grupon,
kies membroj elektigas ĉiujare. Kandidatiĝo al la membroj de D.K. por
2009 estas akceptata nun. Tiuj, kiuj deziras kandidatiĝi al la membro,
anoncu tion al la balotkomitato ĝis la 17a de januaro, 2009.

第95回日本エスペラント大会で「ミニ大学」を開催

第95回日本エスペラント大会は10月11日(土)～13日(月)、和歌山市で開催され、不在参加者を含め 480人(実参加者 350人)が参加。外国からも11か国18人という多数が参加されました。

開会式では、和歌山市長自ら挨拶をされました。(下の写真) 通常は、代理の方が市長の挨拶文を代読されることが多い。

日本大会に参加されたRH会員は方々は次のとおりです。(敬称略)
今泉久典(岩手)柴山純一(神奈川)杉山茂喜(静岡)笹沼一弘(滋賀)
田平正子(京都)森川和徳(京都)竹森浩俊(奈良)盛脇保昌(長崎)



日本大会の開会式

大会の2日目、10月12日(日)午前10時35分～11時55分に、RH主催の「エスペラント・ミニ大学」を発表しました。(1ページ下に写真があります。)

	テーマ	講師
(1)	Nacia Instruprogramo kaj Reformo de Japania Edukado (学習指導要領と日本の教育改革)	笹沼 一弘
(2)	2008 Blanka libro pri mezaj kaj malgrandaj entreprenoj en Japanio (中小企業白書)	今泉 久典
(3)	Ĉu Elektromagneta Ondo el Poŝtelefono estas Danĝera? (携帯電話の電磁波は危険か)	森川 和徳

Prelego de la Esperanto-Universitateto 2008

2008 Blanka libro pri mezaj kaj malgrandaj entreprenoj en Japanio

Imaizumi Hisanori

Blanka libro pri mezaj kaj malgrandaj entreprenoj en Japanio, raportitaj de la japana registaro al la parlamentoj laŭ la fundamenta leĝo por mezaj kaj malgrandaj entreprenoj, enhavas la analizon de stato pri japanaj mezaj kaj malgrandaj entreprenoj en la antaŭa fiskjaro, kaj la politikon por mezaj kaj malgrandaj entreprenoj en tiu ĉi fiskjaro.



La 2008 Blanka libro pri mezaj kaj malgrandaj entreprenoj en Japanio enfokusigas du problemojn pri mezaj kaj malgrandaj entreprenoj. La unua problemo estas progresigi produktivecon de mezaj kaj malgrandaj entreprenoj. La dua problemo estas vigligi lokajn ekonomiojn per fortoj de mezaj kaj malgrandaj entreprenoj.

Konjunktura stato en la fiskjaro 2007 pri mezaj kaj malgrandaj entreprenoj en Japanio

En la fiskjaro 2007 prezoj de petrolo kaj aliaj materialoj tre altiĝis, kaj nombro de konstruadoj tre malmultiĝis pro pliseverigo de la leĝo pri la normo de konstruado, tial konjunktura stato pri mezaj kaj malgrandaj entreprenoj malboniĝis.

Defio pri produktiveca progreso per mezaj kaj malgrandaj entreprenoj en Japanio

En Japanio, loĝantaro malmultiĝas pro malmultiĝo de naskokvanto kaj multiĝo de maljunuloj. Tial ni devas progresigi laboran produktivecon por konstanta ekonomia kreskado.

Labora produktiveco montras produkton po unu-unita

laborkvanto (laboraj horoj aŭ nombro de laboristoj), skalon pri produktiva efikeco.

Pri labora produktiveco, Japanio estas pli malefika ol aliaj evoluintaj landoj. Kaj en Japanio, efikeco de mezaj kaj malgrandaj entreprenoj estas pli malalta ol tiu de grandaj entreprenoj pri labora produktiveco.

Utiligo de Informa Teknologio (IT) estas grava por progresigi laboran produktivecon de mezaj kaj malgrandaj entreprenoj.

En tutglobiĝo de japana ekonomio, mezaj kaj malgrandaj entreprenoj, kiuj faras eksportadon aŭ investadon al eksterlando, havas tendencon esti pli efikaj pri labora produktiveco.

Vigligo de ekonomioj kaj mezaj kaj malgrandaj entreprenoj en lokaj regionoj

Por vigligo de lokaj ekonomioj necesas revigligi mezajn kaj malgrandajn entreprenojn en lokaj regionoj. Tial lokaj bankoj devas financi glate ankaŭ mezajn kaj malgrandajn entreprenojn, kiuj ne havas sufiĉan garantiaĵon, sed havas altan teknologion, kaj esperigecon.

Por mezaj kaj malgrandaj entreprenoj, estas tre grave utiligi eksterajn riĉfontojn, per kunlaboro kun diversaj entreprenoj, universitatoj, kaj aliaj organizoj. Speciale, atendinda estas kunlaborado de agrikulturistoj, prilaboraj entreprenoj pri manĝaĵo, kaj komercistoj por utiligi lokajn agrikulturajn riĉfontojn.

(Fino)

< 解説 >

筆者は、政府系金融機関である中小企業金融公庫（2008年10月より他の政府系3機関と統合し日本政策金融公庫となる）に勤務、2003年以降、盛岡支店、仙台支店で地域の中小企業への融資業務に従事している。中小企業白書は、経済産業省傘下の中小企業庁が作成しているが、その年の中小企業政策のテーマを副題として掲げるのが通例となっており、2008年度版は「生産性向上と地域活性化への挑戦」となっている。

第95回日本大会の「国際言語年」記念シンポジウム 『なぜ今、国際言語年か - 言語の多様性と対話の文化』 (2008年10月12日) に参加して

竹森 浩俊 (奈良)

1. はじめに

本シンポジウムでは、始めにユネスコ事務局長官房特別参与の服部英二さんの基調講演があり、続いて名古屋外国語大学の太谷泰照さんと神戸大学の三浦伸夫さんのパネリストの講演がありました。そしてコメントのタニヒロユキさんの話も交えて、木村護郎クリストフさんの司会で、聴講者からの質問に答える形で行われました。

さて、今回のシンポジウムで服部さんの基調講演で主張されたことは、言葉の大切さ、多言語主義あるいは多文化主義ということです。一番明確に表わされているのが、2001年 UNESCO の文化の多様性に関する世界宣言です。その第1条の一部を、服部さんと鶴見和子さん(弟さんが鶴見俊輔さん)との共著『「対話」の文化』から引用してみます。

「交流、革新、創造性の源である文化の多様性は、人類にとって生物界における生物多様性とまったく同様に必要なものである。そしてこの意味において、文化の多様性は人類共通の遺産であり、また現在および未来の世代のために、認知され、主張されなければならない。」

文化の多様性、すなわち言葉の多様性は、生物多様性と全く同様であって、人類共通の遺産であるとする主張は、多くのエスペランティストやエスペラントの信奉者から賛同されるものと思います。



シンポジウムのパネリストの皆さん

木村護郎クリストフさん、タニヒロユキさん、服部英二さん、大谷泰照さん、三浦伸夫さん

一方、このような言葉の多様性に反して、グローバルゼーションによって言葉が消え去っているということ、世界には6千とも7千とも言われる言語があるが、1世紀足らずで半減するという話が講演の中でありましたが、これは大変深刻なことだと思われます。

2. 言葉の大切さ

服部さんは、言葉の大切さを示すために、さまざまな著名人の言葉を引用されました。

例えば、

- ・人類学者であり思想家のレヴィ＝ストロースの言葉：
遺伝子コードと話し言葉との間には、構造的類似性を持っている。
- ・粘菌学者であり民族学者の南方熊楠の言葉：
「もの」と「ところ」の交わるところが「こと」、「こと」があらわれるところが
ことの葉
- ・ドゥヴィルパン前フランス首相の言葉：
ひとつの言語の画一化は人類の緩やかな死を意味する。
- ・メキシコの詩人オクタビオ・パスの言葉：
すべての文化は混交によって生まれる、出会いである、衝撃である。
その逆は孤立であり、文明の死である。
- ・言語学者フンボルト：言語学は人間そのものの学問だ。
- ・服部さん自身の言葉：シルクロードとは文明間の対話の道

3. 言葉の多様性と多言語学習のすすめ

言葉は多様です。アラビア語では砂に関する言葉が10種類以上、イヌイットの言葉では氷に関する言葉が40種類以上、トワレグ語(サハラ砂漠の民の言葉)ではなつめやしに関する言葉が200種類以上あるそうです。また、日本の魚に関する言葉の豊富さ、欧州の肉に関する言葉の豊富さを指摘されました。それぞれの言葉で、それぞれの文化をはぐくんでおり、それぞれの文化の独自性を尊重することが大切だというわけです。

このような考えに立つと、バベルの塔に見る原始の言葉の神話は、単一言語は人間の貧困化を意味していることになるという指摘は面白いものです。

このような多言語主義は、複数の外国語の学習を奨励すること(多言語

学習のすすめ)ということになります。面白い比喻ですが、ラーメンばかりでは飽きてしまう。カレーやラーメンや色々美味しいものがある、そこからラーメンを選べばよい。外国語教育でも、英語一辺倒はダメだという考えです。

4. 共通語について

共通語についてはどのように考えているのかというと、服部さんは、またまた面白い比喻をされています。リングアフランカ(Lingua franca 学術共通語)としての英語は、登山に例えると5合目を登るようなもの。共通語は、簡単に学びやすいけれども、言葉の何か大切な部分が欠けてしまうというイメージでしょうか。服部さんは、鶴見和子さんとの共著『「対話」の文化』の中で、リングアフランカとしてのラテン語は習得したので、トマス・アキナスの『神学大全』は辞書なしで読めたと言っています。(昔は読めた、今はだめだけれど。)しかしアウグスチヌスの『神の国』や『告白』とかは、ものすごく修辞法(レトリック)が出てきて、辞書なしでは読めなかったと言っています。

結局、共通な言葉による交流ではなくて、多言語による交流がよいということです。

一方、エスペ란ティストやエスペラント信奉者が求めたものはエスペラントという共通語(学習容易で表現力豊かな中立などの謳い文句の理想の言葉)による交流です。

結論は出ていませんが、多言語による交流となると、通訳者の、ごく少数の通訳者の涙ぐましい努力や多言語教育による膨大な費用などは未解決のままのように思われます。しかし、そうであったとしても、お互いの言葉を敬うという姿勢で交流するということは大変重要だと思います。

エスペラントによる理想的な共通語による交流は、未だ何となく明確な形が見えないように私は思いますが、その第1の理由は、お互いの言葉を敬って交流するという姿勢と理想の言葉エスペラントとの関係がはっきり分からないからです。エスペラントを使って、果たしてどれだけ、お互いの言葉の素晴らしさを学べたのでしょうか。あるいは、日本語の素晴らしさを、異なる文化に暮らす人たちや異なる言葉を話す人たちに、エスペラントで、どれ程伝えることが出来たのでしょうか。実に力不足のように思えてなりません。

更に、グローバル化によって絶滅する言語を救うことに、エスペラントはどれほど役に立つのか、無力感を禁じえません。

エスペラントについて講演で述べられたことは、「エスペラントの試みは、リングアフランカをもたらす不平等、不公平、言語による支配の拒否という意味で評価できる。」ということです。

5. 言葉の音としての大切さ

言葉の大切さに関連して、言葉は音が大事であると服部さんは主張しています。そして次の発言がありました。

「人類は600万年 音のみで生活、文字は5000年前、文法は150年前」

たまたま、同じ日に、読字障害の番組がNHKでやっていて、同じフレーズが出てきました。以下に引用します。

<http://www.nhk.or.jp/special/onair/081012.html>

NHK スペシャル「病の起源 第4集 読字障害 ~文字が生んだ病~」が放映された。

会話能力にも問題はなく、しかも眼に異常があるわけでもないのに、文章を読むのに著しい困難を抱える人たちがいる。文盲とは全く別の病、読字障害だ。この障害が見つかったのは、19世紀末の英国。数字の「7」は読めるのに「seven」を見せると読めない中学生が見つかった。当時は、まれなケースと思われていたが、英米では人口の10%、日本では5%もいることが判ってきた。最新の研究によって読字障害の人は一般の人と、脳での情報処理の仕方が異なることが明らかになってきた。通常、情報を統合する領域で文字を自動処理しているが、読字障害の人は文字処理をスムーズにできないのである。人類が文字を使い始めてわずか5千年、この時間の短さ故、脳は十分に文字を処理できるよう適応しきれていないのである。

番組では、ジュラシックパークで恐竜博士のモデルになった、ホーナー博士が読字障害として取り上げられていました。他にもトム・クルーズや黒柳徹子など有名人で読字障害の方がいるようです。

言葉が、特に音というものが重要だという主張として、例えば、鶴見和子は、脳梗塞で半身不随になったのですが、歌によって蘇った、命の泉となったのが和歌だったということ、宮中歌会始(ニュースとかで取り上げられ

ている印象では、単調に語尾をやたら長く伸ばすだけで、それ程たいしたことがないと思っていましたが、実はあれは導入で、その後合唱して歌うようです。以下 URL 参照。)

<http://www.kunaicho.go.jp/12/d12-01.html>



(写真は宮中歌会の場面)

コーラン(コーランは詠唱するということ。)、万葉集(万葉集では、なぜ庶民の歌に天皇の歌が混じるのか。天皇は歌人、豊稷 愛 恋の歌、稲霊に祈る。)等を挙げていました。

また、芥川賞作家の楊逸(ヤン・イー)さんの言葉、「ひたすら話す、すると書けるようになる」も上げていました。更に、日本の言語教育は音を忘れてしまったとし、漢文が言語教育方法に与えた影響が、英語教育に影響していると主張されました。

漢文という、日本独特の翻訳方法はそれなりに評価できると思いますが、言葉における“音”について考えるとき、私が思い出すのは、エスペラントの大会では開会式と閉会式で、La Espero や La Tagiĝo が斉唱される時、何かしら、深い感動を抱く時の思いです。

6. エスペラントの2つの側面

以上、今回のシンポジウムを聴講しながら、エスペラントについて考えたことをまとめると、言葉の多様性は人類の共通の遺産であるとする主張は、全く当然な主張ですが、異なる言葉を話す人々との交流の場面では、いったいどのような相互理解を目指すべきなのかということです。お互いが色々な言葉を駆使して、あるいは通訳を介して、多言語での話し合いでの交流を望むべきなのでしょうか、あるいはエスペラントのような共通語で話し合いをするべきなのでしょうか。そして、また、共通な言葉で交流するのは、いったいどのようなことなのでしょうか。どこまでお互いを理解できるの

か、お互いの文化に尊敬の気持ちを抱きながら、話し合いができるのでしょうか。

私は、100年以上の歴史を持つエスペラントには、日本語や英語のような民族語のような1つの言葉として役割があるように思われます。決して、富士山の5合目を登るだけの共通語というだけではないように思います。しかしながら、いわゆる国際語としての役割も持つと思いますから、二重の役割を演じながら、揺れ動いているように思えます。

エスペラントの創造の歴史をもう一度思い出して、ひも解いた時、多言語社会の悲劇から、その解決として生まれた言葉ということになるわけですから、今回の服部さんの多言語社会とは大きく異なるように思います。多言語であるだけではだめで、異なる言葉話す人々が、お互いの文化を尊重することが必要で、それが大変難しいような気がします。

しかしながら、“Deveno de Esperanto”を読み返しますと、エスペラントをザメンホフが創った時、実に多くの恵みを様々な言葉から得ていたことが分かります。多くの単語をヨーロッパの言葉から採用したこと(この点について、服部さんは『「対話」の文化』の中でヨーロッパ人にとって有利であり共通語にはならないと主張しています。服部さんだけではなく、このヨーロッパの語彙の採用に対する非中立性の主張は、よく聞きます。しかしながら、厳密な中立性を求めて、全く恣意的な、自然な言葉にない語彙を採用したならば、人類共通に覚えにくい語彙を持つ言葉になったと思います。)、英語の衰退した動詞の活用から、簡潔で規則的な動詞の活用を見出したこと、接尾辞による生産的な派生語の生成などなど。

結局、豊かな多言語、多文化の果実をエスペラントに取り入れたということ、現実が多言語の悲劇の中で理想の言葉を生みだそうとしたのに。

エスペラントが共通の言葉としての役割を果たすには、多言語社会で何が出来るのか、どこまで出来るのか、やれることとその限界を知ることだと思います。それと、この素晴らしい言葉を楽しむことが、エスペラントのもう一つの役割だと思います。

(終)

ねこの手エスペラント部発

山口百合子（横浜）

メンバー12名中、藤巻さんの通信教育初級を終了した人達が5名いたということもあり、身近に感じている藤巻さんに来ていただくのは刺激になって良いかと思いたちました。昨年のUK(世界大会)中ねこの手ハウスに招待したフランス人二名とロシア人二名に対して自己紹介をしたのが初めてでしたが、今回も同じ内容の自己紹介をスムーズに言えるように練習をして当日を迎えました。ねこの手の会員山本美郷さんも遠方から参加しました。いつも歌っている歌と一緒に歌ったり、ご馳走を食べたり、藤巻さんの初級講座を聞いたりしてあっという間の数時間でした。彼は上手にみなさんをほめてくれて一層藤巻ファンが増えた感じでした。藤巻さん自身も竜宮城に行ったみたいだったと喜んでくださいました。



藤巻さんの初級講座（奥の中央が藤巻さん）

ねこの手について

正式名称は「自立支援の会グループねこの手」。横浜市南区にあるボランティア団体。エスペラント部は昨年始めに発足し、活発に活動されています。

<http://members.ytv.home.ne.jp/nekonotehouse/index.htm>



藤巻さんの初級講座の後の交流会

続いて11月に来るフランス人を迎えるための準備に入りました。フランスのノルマンディ から8名が約一ヶ月の予定でやってくるということで、彼らを招待した元子連れの会の大川さんと連絡を取り合って、我が家に一週間2名宿泊、11月17日にねこの手で全員で交流会という予定が決まりました。丁度他に予定があって出席できないことでほっと胸をなでおろしたメンバーもいれば、毎年何人もの外国人がねこの手に来てくれて感激していると言うメンバーもいます。

17日の交流会の準備として、折り紙上手のメンバーに教わってみんな箱を作りお土産にすることにしたり、絵手紙の先生でもある大島さんが描いたねこの手ハウスの全景の絵葉書を8人分印刷したり、ねこの手の会員ですがエスペラントのメンバーではない人が石にだるまの絵を描くのが上手で、8人のフランス人のために壁掛けになるように作ってくれたり、お茶が趣味と自己紹介をする予定の人がお点前セットを用意したり、店内に貼り出されている各種講座のエスペラントでの説明を練習したりとねこの手ならではの歓迎の準備をしています。

ただ、よちよちエスペラント会話教室という名前が始まったねこの手エス

ペラントですが、ここに来て戸惑いが出てきました。一番新しくエスペラントを始めたさぐっちゃんが、PSI(ドイツの国際イベント)に参加が終わったらエスペラントは止める予定だったのですが、反対に俄然やる気になり、パソコンが得意ということもあって、ネットの仮想社会でエスペラント講習会に参加したり、日本のミクシイのエスペラント版(ipernity)に参加したりして、どんどん世界の人達と交流を深めています。また、一人で日本大会に出席し一層知り合いができ、年末の日韓中交流セミナーの申し込みもしているという急前進状態です。他のメンバーに比べて20歳以上若いということもありますが、その目覚ましい動きに他のメンバーはたじろ。前田さんはLa Revue Orienta 誌の添削に投稿をしてぐんぐん上達していくことを楽しんでいますが、その他のメンバーの中にはいつ止めようかとささやき出した人達も出てきました。かってエスペラント子連れの会をやっていた時にも子連れのため毎週参加できる人が少なく進度にばらつきが出て、「testudo」と「kuniklo」のグループ分けをしたものですが、今回もその必要性が出てきたようです。

「ねこの手ハウス」は火曜日から土曜日まで開店していて、私は毎日当番として出ているため月二回月曜日にエスペラント学習会をやっているのですが、月曜日が毎週つぶれるのもしんどい。しんどいことはやらないで楽しいことだけをしようというねこの手の活動としては考えどころです。たびたび休んでいても、止める気は全くない人達もいますし、できる人は自分で工夫してどんどん進んでもらって、私はねこの手らしくゆっくり楽しく脳トレを手伝う気持ちを貫き通そうと思います。年だから覚えられないと言う人達のために歌だけの日があっても良いと思いインクの色も薄くなっているRH 全盛期の kantaro の中から自分が歌える歌をピックアップしています。

17日元エスペラント子連れの人達3人に連れられてノルマンディーの人達が無事到着しました。料理上手の人が朝から来て「ねこの手ハウス」で販売している無農薬野菜を使って作ってくれた料理と、弘明寺商店街で購入した料理が見栄えするほどに並びました。前もって各人のプロフィールが届いていたのでそれを見ながら考えて、必ず片側にはフランス人が座るように23名の席順を決めました。椅子の下には手作りのお土産をおきました。ねこの手のメンバーはさんざん自己紹介の練習をしていたのに、いざとなったら名前だけの人が多かったのですが、睦子さんと前田さんは原稿を読むこともなく延々と自己紹介をして拍手されました。椅子の下には何があるかな？とお土産の存在を知らせると、みなさん大喜びでした。本間さんの得意なお点前も思いがけない事だったようです。数曲コピーした歌集も役に立ちましたが、盛り上がったところでフランス人全員で素

敵なコーラスを聞かせてくれました。練習したわけではないけど、東北大会に参加した時歌ったのだそうです。交流会が終わってからも歌声があちこちから聞こえるほど盛り上がっていました。クロードが後で言っていたのですが、日常歌は全く歌わないそうです。ねこの手エスペラントでは初心者でも歌は楽しめるから毎回歌を数曲歌うと言うと、我々も今度からそうしたいと言っていました。

その後我が家に泊まっているクロードとブリジットとねこの手からは7人が弘明寺駅近くの居酒屋で食事をしました。さぐっちゃんはこの場にも翌日の鎌倉案内にもその晩の我が家での晩餐会にも、最後の日の送別会にも参加、とエスペラント漬けの日が続きます。我が家での晩餐会では睦子さんと杉山さんがブリジットにゆかたや着物を着せてあげて写真を撮りました。着物をプレゼントするとブリジットの喜んだこと！

ねこの手エスペラントの人達は一層エスペラントとお近づきになったと思えますが、何よりなのはそれぞれの趣味や特技がエスペラントの場で役に立ったという実感があったことではないかと思えます。

さて、12月からの脳トレどうなりますことか。

(終)



フランス人の歓迎会

第27回日韓中青年セミナー(KS)

期日：12月27日(土)～29日(月)

場所：横浜ベイサイドユースホステル

テーマ：Ekologio en nia ĉiutaga vivo

ホームページ <http://www.jej.jp/ks/index.html>



エスペラント催しもの情報

12月はザメンホフ祭が各地で開催。次のアドレスに、催しものの最新情報が載っています。 <http://www2.tokai.or.jp/esperanto/eventoj.html>

インターネットに接続できない方は、80円切手が貼られた返信用封筒をお送りください。インターネットの情報を印刷して返送いたします。

La Harmonio 219号(12月発行)の原稿締切は 1月24日(土)

Ĝis antaŭ la 24-a de la venonta januaro, bonvolu sendi vian manuskripton al la redakcio por la numero 219, kiu eldoniĝos en februaro, 2008.

MORIKAWA Kazunori, 13-8 Sirie, Oyamazaki-tyo, Kyoto-hu, 618-0071 Japanio

FAX +81-75-955-1627 Retadreso: kz_morikawa@yahoo.co.jp

La Harmonio 218号 2008年12月6日発行

編集発行 Rondo Harmonia (国際語教育協議会)

* 組織委員会書記局

〒631-0815 奈良市西大寺新町 1-2-31-703 竹森浩俊

FAX 0742-36-4302 電子メール takeh703@deluxe.ocn.ne.jp

* La Harmonio編集部・財務担当

〒618-0071 京都府大山崎町大山崎尻江 13-8 森川和徳

FAX 075-955-1627 電子メール kz_morikawa@yahoo.co.jp

* ホームページ <http://esperanto.jp> 電子メール oficejo@esperanto.jp

* RH情報誌のホームページ <http://esperanto.jp/info/>

* RH会費(会計年度 1月1日から12月31日まで)

RH会員お一人の場合

一般会費(La Harmonio PDFダウンロード) 2,400円

一般会費(La Harmonio 印刷物郵送) 3,600円

ご夫婦ともRH会員の場合

一般会費(LH PDFダウンロード) + 家族会費 4,200円 (2,400+1,800)

一般会費(LH 印刷物郵送) + 家族会費 5,400円 (3,600+1,800)

* 会費払込先 郵便振替口座 01050-3-11902 加入者名「国際語教育協議会」

または イーバンク銀行 マーチ支店 普通預金 3302340 「森川和徳」

(イーバンク銀行の口座からの送金は無料)